降誕日深夜礼拝　　蝋燭を点して、誕生を祝う　　２０２２．１２．２４．深夜

今夜７時からは、蝋燭を手に持って礼拝を守りました。以前話したことがあったかと思いますが、改めて、蝋燭を点して、イエス様の誕生をお祝いすることの意味について、お話します。

私たちは、教会で礼拝をする時、いつも、蝋燭に火をつけています。
どちらからつけますか？右ですか、左ですか？

礼拝で祭壇の蝋燭に火をつける時は、右に先につけます。それでは、消す時はどうでしょう。左から消して、最後に右を消します。

これは、祭壇の上にある祈祷書を照らすのが、先ず第一の目的だからだと私は思います。礼拝で、祈祷書は向かって右側に置く伝統があります。私が子どもの頃は、司祭は壁に向かって立ち、礼拝の途中で、福音書を読む前に、右の祈祷書を左に移しました。そして聖餐式でパンとブドウ酒をみんなが飲み終えると、祈祷書はまた左から右に戻されて、祝福をして、終わりました。今はずっと右側にあります。

蝋燭の火は、何よりも、先ず暗い所を照らす役割のために使われるのです。

聖書の初め、創世記第１章１節から５節。
『1:初めに、神は天地を創造された。2:地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3:神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。4:神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5:光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。』

神様は、世界を造るのに、最初の日には世界が闇に覆われていた時、「光あれ。」と言って、光を創造されました。

礼拝の初めに、蝋燭に火を点すのは、この神様の天地創造から始められた、聖書に心を向けることが第一です。日曜学校などで、昔は「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えなさい。」という言葉が、式文に出てきました。
いつも、礼拝の最初に蝋燭に火がついたら、「神様が世界を造られた。そして私も造られた。」ということを思い出しましょう。

その他に、今月は、礼拝堂の隅に、４本の蝋燭を置いています。これは、クリスマス案内にも書いていますが、イエス様が生まれるまでの、聖書の歴史を思い出させるものです。

１本目は、約束の蝋燭。イエス様よりも２０００年。今から言えば４０００年位前、アブラハムという人がいました。
神様は、アブラハムに、自分の家から出て、神様の示す地に行きなさい。あなたの子孫を通して、世界を祝福しよう、と言われたのです。結局その子孫の中に、イエス様がいるわけです。
アブラハムは、知らない土地へ、神様の言葉を信じて旅に出ます。

さて、アブラハムから数百年後、イスラエルにはダビデとかソロモンとかいう王様が出てきました。その頃には、預言者と呼ばれる人々も出てきて、神様からの言葉を人々に知らせる仕事をしていました。

特に、人々が間違った生き方をしていると、「神様は悲しんでおられるよ。間違った道を歩まないで、正しい生き方をしなさい。」といい続けました。そして、イスラエルが他の国に滅ぼされたり、他の国の植民地になったりした時も、「やがて、救い主がやってくるから、希望を持って待ちなさい。」と励ましたのです。

この預言者たちのことや、彼らの語った言葉、聖書を思い出して点すのが、２番目の、預言者の蝋燭です。この日は、聖書の日曜日とも言われています。

そして３番目は、イエス様より先にこの世に来た、洗礼者ヨハネ。４番目は、イエス様を体に宿したマリヤさんを覚える蝋燭を点します。

これらは、すべて、イエス様の誕生を期待しての蝋燭でした。

そして、教会は、最後に５本目の蝋燭を点すところもあります。
ヨハネによる福音書の１章９節から１４節までを、以前の口語訳聖書で読んでみましょう。

『9:すべての人を照すまことの光があって、世にきた。10:彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。11:彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。12:しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。13:それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。14:そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。』

このまことの光であるイエス様の誕生を祝って、私たちはクリスマス礼拝。特に光の礼拝であるこのキャンドルサービスをしています。

現実的なことを言えば、１２月のこの時期は、イスラエルでも大変寒い季節です。都のエルサレムに雪が降る時もあります。とても羊飼いが野宿しながら、羊の番などできない季節です。

ですから、クリスマスをイエス様の誕生日と考えるのは少し違っています。誕生日ではなく、イエス様の誕生を記念し祝う日、というふうに受け取るのが正しいのでしょう。

それでは、どうしてこの時期にクリスマスを祝うのでしょうか。

それは、キリスト教が北ヨーロッパに伝えられたことと関係があります。
北ヨーロッパでは冬になると、昼の長さがとても短くなってきます。それで、太陽がまた戻ってくるように、と太陽を神様のように礼拝する信仰がありました。

しかし、太陽は神様が造られたものです。

それよりも、本当の太陽。義の太陽であるキリストこそが私たちを救うのだ、ということを教えるために、冬至を過ぎた頃を、イエス様の誕生を祝う日に決めたのです。

陽の長さが短くなる、この季節に、人々に希望の光をもたらす、イエス様を祝うのに一番相応しい時期だということです。

私たちは、イエス様の誕生を、蝋燭の光を点すことで祝いますが、それだけで終わることなく、私たちも人々に光をもたらす、イエス様の弟子として働くことが大切でしょう。

イエス様は、マタイ５章１６節で、『、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

と教えています。イエス様の光を受けて、光を放つものに成長したいと思います。